

Augustine, *Confessions* I, Books 1-8,
edited and translated by Carolyn J. B. Hammond,
Loeb Classical Library 26,
Cambridge, Massachusetts; London: Harvard University Press,
2014, pp. lxvi + 414, ISBN: 978-0-674-99685-4, B/6, \$26.00

Augustine, *Confessions* II, Books 9-13,
edited and translated by Carolyn J. B. Hammond,
Loeb Classical Library 27,
Cambridge, Massachusetts; London: Harvard University Press,
2016, pp. xlii + 446, ISBN: 978-0-674-9993-9, B/6, \$26.00

松 崎 一 平

原典との対訳を特徴とする、英語圏の代表的な古典文庫 Loeb Classical Library (以下 LCL) の、アウグスティヌス『告白』全2巻が102年ぶりに改版された。Knöll のテキスト (Teubner, 1909 年) と、それより 200 年以上まえの W. Watts に遡る英訳 (1631 年) とからなる旧版 (1912 年) は、テキストと訳がときに一致しないが、Hammond による新版は、O'Donnell, *Augustine: Confessions*, 3 vols. (1992 年) 所収のテキストとそれにもとづく新たな訳とからなり、のちに見るように、そのことが訳を特徴あるものとしている。LCL26 の Preface によると Hammond は、Cambridge の Gonville and Caius College で dean の職にある古典学者とのこと、1996 年に Oxford World's Classics に Caesar, *The Gallic War* を上梓している。従って、訳にも注にも古典文学にもとづく豊かな学識が感じられ (e.g. 26, pp. 150-151, n. 29), 多くの点で示唆に富む。LCL では、たいてい Introduction は短く、複数巻からなる著作では最初の巻にのみ付されるが (旧版は Introduction を欠き 26 にだけ 2 頁の Preface), 新版ではいずれの巻にも、Preface (3 頁と 2 頁) とともに 30 頁近くの Introduction が

付されている。27のPrefaceによると、26刊行後2014年の終わりに攻撃的な肺癆と診断されて辛い治療を強いられ、急遽書いておくことにしたという。

まず、翻訳について。26のPrefaceで、翻訳上の方針について、(1)ラテン語を知らない読者には原文の音と文の組み立てとの感覚を与えることと、(2)いづらかラテン語を知る読者には原文の構造と修辭的な表現とを理解するのに十分な援助を与えることとの2点だと述べられる(26のIntroductionの7に簡明に再述)。『告白』第10巻第27章第38節や第13巻第38章第53節で原文も訳文も、散文表記(*scriptio continua*)によらず、詩行のように句や節や文単位で詩のごとく行を構成して(*per cola et commata*)、文のもつリズムや頭韻や脚韻を可視化し、原文に織り込まれた音楽的な修辭を明示している点は、(1)の方針のひとつの現れだろう(むろん(2)にもかかわる)。たほうでHammondは、語順や文中の句の位置などを、可能なかぎり(ときには文法的にやや無理をしても)原文と揃えようと努めているように思われる。このことは、ラテン語を知らない読者には、読みづらさの原因になりかねない。だが、すぐれた英訳も多いのにあえてLCLで『告白』を読むほどのひとなら、なにがしかラテン語の知識をもち、訳と原文を照合しながら読み進めるに違いない。ならばHammondが(2)の方針に力点を置くのは当然のこと。ようするに訳とは、原文と訳文とが相補的に読者の読解を深めうる、古典を理解するためのすぐれた仕掛けだということだ。くわえて、原文の下部に付されているテキストの重要な異同の情報、訳の右脇に小さく付されている、必要なものに絞り込まれた参照箇所は、精密な読解を助けるだろう。テキストを深く読むように促す脚注も多い。

ところで、Verheijenによる校訂本(1981年、再版1990年)とO'Donnellの注釈以後、程度はさまざまだが両者をなんらか参考にして、各言語で相当数の『告白』の新訳が試みられた。とりわけ英語圏で活発で、Chadwick (*Saint Augustine, Confessions, translated with an introduction and notes by Henry Chadwick, 1991, Oxford UP*), Boulding (*The Confessions, The Works of Saint Augustine, a Translation for the 21st Century I/1, introduction, translation and notes, Maria Boulding, 1997, New City Press*), Burton (*Augustine, The Confessions, translated and edited by Philip Burton with an introduction by Robin Lane Fox, 2001, Everyman's Library*)などが現れた。最近、Conybeareは*The Routledge Guidebook to Augustine's Confessions* (2016年)(思うに、こ

の書も書評の対象とされるべき重要な著作)の Preface で, Boulding の英訳を用いる理由を, 主観的な選択だと最終的にはいうものの, 自身と同じように『告白』を読むからといい, さらに, 第 12 卷第 24 章第 33 節と第 8 卷第 5 章第 10 節とから例をとり, うへの 3 つや LCL26 (LCL27 は未刊行だった) などの訳の特徴を比べて長所短所を手際よく指摘し, Boulding 訳について, 訳語の選択が的確なこと, 文章が滑らかで自然なこと, 随所で原文に応じる音楽性をもつことなどを指摘する。Hammond 訳への目立った言及はないが, Conybeare が, とりあげたものうちそれが唯一の対訳である点に配慮しないのは, 対訳の役割を見逃すもの。上述のように, Hammond の方針は Conybeare が Boulding を選択する理由とほぼ重なるも, 対訳であることを活かして, むしろそれを徹底しており, 具体例はあげないが, この 2 年余り『告白』ゼミで使用してみて, おおむね成功していると評者には思われる。

つぎに Introduction について。26 は, 1. Genre, 2. Structure and Composition, 3. Augustine's Background and Early Life, 4. Theories of Meaning, 5. Language and Rhetoric, 6. Augustine's Bible, 7. This Translation, 8. History and Constitution of the Text の 8 章から, 27 は, 1. Audience, 2. Monnica, 3. Mysticism, Memory, and Mind, 4. Exegesis, 5. Time and History, 6. Conclusion の 6 章からなる。いずれも研究史を踏まえつつ, はっとさせられる指摘が随所にある, 有益でバランスのいいものとなっている。周知のように B6 版大とコンパクトな大きさにもかかわらず, 26 には, Abbreviations, 必要不可欠なものに絞り込まれた References と General Bibliography が付され, さらにアウグスティヌスの年譜と, 同時代のキリスト教とローマ帝国について重要事項に絞り込んだ年表とが対照されている。27 には, 26 の Abbreviations と Bibliography の補遺が, さらに人名と地名の Index と主要な語・事項の Index が付されている。これらは, LCL 特有の持ち運びやすさ・堅牢さと相まって, 一般の読者にも研究者にもまことにありがたい。ただし, いちいちあげないが, 誤植や参照箇所の誤記が散見するのは残念だ。以下, 評者にとって興味深く思われる章を選び, 手短かに内容を紹介する。

まず 26. 1 で Hammond は, 冒頭にマルクス・アウレリウス『自省録』第 8 卷第 11 章を引用し, そこに列挙されている普遍的な問いを念頭において考察していく。『告白』は, アウグスティヌスによる祈りとしての神との対話でありな

がら、聴衆・読者を強く意識した、修辞に富む、説得をめざす弁舌であり、アリストテレス『詩学』（1452, 1454）のいう *anagnorisis* の熟練の成果だとする。Hammond は考察を進め、最終的に、『告白』は、諸点で古典にもとづきながらも前例のない書物であって、主への呼びかけを含む親しみ深い文学形式から、神の諸属性や神に近づく方法の探究に移行する構成に、同時代の読者たちは新しい文学形式に出くわしたように感じただろうという。それは、単なる自伝でも祈りでも回想でも教訓でもなく、一個人のおこないに強烈に焦点をあてることからの、創造における神の諸活動をめざす新たな方向づけへの理詰めの前進である。そしてこれの窮極目標は、『告白』の冒頭から顕わであり、人間による神の探究が神自身によって起動され望まれているということだ。2で、『告白』が、古典文学に類例がない13巻という数からなることは、アウグスティヌスが古典文学に批判的になりそれから離れようとしたことの現れだという。賛成だ。また、自伝的な始めの10巻と創世記解釈の終わりの3巻という構成は、第11巻の始めに冒頭の神への呼びかけを反復することから意図的で、有意義だとする。3では、『告白』のテーマはアウグスティヌス自身ではないし、名前があげられる16人がみな、アウグスティヌスの回心になんらか寄与したひとたちに限られているという。さらに、彼の受けた教育について説明される。4では、マニ教と新プラトン主義を中心に、『告白』の記述にかかわる諸思想とアウグスティヌスの思想的遍歴とが手際よく説明され、最終的にキリスト教が、学として聖書にもとづき、生として聖餐の秘蹟を核にもつことが、さらには三位一体論と受肉論が説明されているとする。5-8は、原典の読解をも視野に入れた、研究史を十分に咀嚼した要を得たすぐれた解説。

重篤な病を得たことで急遽書くことにしたという27のIntroductionは、時間に恵まれれば豊かな実を結ぶことを確信させる魅力的な未完のトルソというべきもの。その始めにHammondは、わたしたちが近代的文学形式に影響されて、『告白』を、神学的な内容よりも自伝的なそれにおいて評価しがちだと指摘し、その陥穽を克服せんとする。1で、アウグスティヌスは、自分が教え、のちに批判するにいたった修辞学を、放棄するのではなく、却って人々のために用いることを決断したという（『告白』はその成果）。2では、Monnicaの語られ方とオステリアに残された有名な墓碑銘とについて説明したうえで、アウグスティヌスは、そのときの信念にもとづいて、各方面にたよりがいのあるmentor（オデュッセ

ウスの友人でその息子テレマコスの師傅 Mentor に由来) を求める性向をもつと指摘する (e.g. Hierius, Faustus, Ambrosius, Simplicianus, etc.)。Hammond によれば, Monnica も mentor のひとりで, 一般に物語のなかでは mentor が健在のあいだ主人公が成熟にいたりえないように, 第 9 巻でその死を回想したのちに, 権威あるキリスト教徒としてのアウグスティヌスの声が聞こえるようになるという。古典学者らしい興味深い指摘だ。3 では, 『告白』で語られる見神体験 (uisio dei) について考察される。「わたしについて書かれた」(Ret., 2.6.1) 第 1 巻-第 9 巻のうち, 第 7 巻と第 10 巻は自伝的性格に乏しく, いわゆるミラノの uisio が回想される前者は, アウグスティヌスに特有の, ころころとも自己ともいふべき記憶 (そこの最奥でそこを越えたところに神は見いだされる) が省察される後者の準備という性格をもつ。オステシアの見神がモニカと共有されたことは, それが知を必要としないものだったことを示唆する (聴衆は uisio を身近に感じるだろう)。彼は, 記憶を手がかりに神を探究するさいにも, 上述のように詩的・音楽的表現 (per cola et commata) を用いるため, lyrical な印象が生まれる。このように, Hammond によれば, アウグスティヌスは, 神学的な内容 (第 11 巻-第 13 巻) に読者を飽きさせずいやがらせずに誘おうと, 青年時代からつかいなれた修辞学をいわば宣教のために駆使している。第 1 巻-第 9 巻のいわゆる自伝的部分は, ルクレティウスが明かしている (*De rerum natura*, 4.11-16), こどもに苦い薬草を飲みやすくするために, まずは甘い蜂蜜を味あわせる詩人の企てに類するものという。慧眼だ。4 では, 聖書解釈, とくに比喩的なそれ (*Gal.*, 4.24) の歴史を簡潔に振り返りながら, 「聖書について」(Ret., 2.6.1) 書いた第 11 巻-第 13 巻の創世記解釈について考察する。まず Hammond は, 自伝的部分で聖書への言及や暗示が個人のありかたに適應されている点に注目する。第 12 巻-第 13 巻の普遍的・規範的な聖書解釈は, 第 1 巻-第 10 巻の身体的人間的な聖書の適用と関係づけて理解されるべきであって, こうして個人の体験の物語は, 人間存在の普遍的宇宙的意味と連関する。5 では, 第 11 巻のいわゆる時間論を念頭に, アウグスティヌスの時間把握が録音録画を再生できる現代のそれとは大きく異なることに留意しなければならないと指摘したうえで, アウグスティヌスは修史によりも, むしろ時の直線的前進がいかに神の摂理の働きを表現するかに関心をもったという。6 では, 『告白』のみならずアウグスティヌスの著作の全体を覆うテーマは, 愛の特徴的な強調と, 正しいおこないの鍵たる動機の分析だとい

う (cf. *In Ioh. Epist. ad Parthos tract.*, 7.8)。アウグスティヌスにとって、適切な愛と適切な動機こそが、神との善い関係を見いだすために不可欠だからだ (これは、上述の 26 の Introduction の 3 とあわせて理解されるべきこと)。さらに、『告白』の頂点にしてそれを越える第 3 のテーマが、三位一体だという。そう指摘するとき Hammond は、三位一体が見え始めたと宣言する第 13 卷第 5 章第 6 節に注目し、かつ終結部 (第 13 卷第 38 章第 53 節) の *Et hoc intellegere quis hominum dabit homini?* 以下が、3 行 1 組が 3 組重ねられる点 (*per cola et commata*) を踏まえる。

かつて G. Clark は、歴史家として『告白』を論じた (*Augustine: The Confessions*, 1994, Cambridge UP, 2005 年に Bristol Phoenix Press より改訂版, 『中世思想研究』XXXVII, 1995 年に松崎による書評)。Hammond の 2 つの Introduction は、Conybeare の前掲書とともに古典文学研究者らしい知見にもとづき、思うに、遠く Gibb と Montgomery の注釈 (1908 年, 再版 1927 年) の系譜につながるもの。未完のトルソがめざしている完成の姿は、カトリック・キリスト教に回心したかつての修辞学教師が、神と人間のあるべき関わり方を自己の体験を手がかりに省察し、読者をそこにいざなうべく、修辞学の技術と古典文学の伝統を縦横に利用し音楽的な魅力をも巧みに配しながら、救済史的視野をもって説明しようとした類のない著作として、一体的に『告白』全 13 卷を説明することだろう。伝統的に哲学や宗教の研究者が『告白』を研究してきた我が国においてこそ、2 つの Introduction はこれから大いに咀嚼されるべきだろう、たとえ批判的にであれ。重ねていうが、Hammond の意図するとおり、原文をこの対訳で熟読することは、古典としての『告白』の魅力を深く知るためのとても良い機会となるに違いない。
